

# 「母のお話」

岸 田 秋

三六

八歳になる長女は「實際にあつたお話の方がいゝ」こ注文する。七歳の次女は「小人や王女様のお出でくるお伽噺がおもしろい」こいふ。毎日せがまれて、この母の貧弱な「話の囊」はよく急を告げるのである。

いつも感じるここだが、昔から永い年月を経て、幾代もの子供に親生まれ、忘れられずに遺つてきた童話は、いろ／＼の意味で、必ずそれだけの價値をもつてゐる。しかし、何こしてもそれ等はその時代の道德觀で書かれ、また語られてゐる。封建的なものゝ考へ方が支配してゐる空氣のなかで世俗的に決められた善行こか、悪行こか、褒められるべきここ、貶されるべきここは、相當吟味しなほさないここ。そのまゝ現代の良心の基準にはなり得ないものがあるここ思ふ。極く自然な人間性に根ざした新しい倫理を、識らず知らずのうちに植ゑつけてやるやうなお話、さういふもの

を、現代の母親は第一に求めてゐるのではなからうか。

佛の文豪アナトール・フランス（一八四四—一九二四）の作品に、ピエル・ノジュールミいふ短篇集がある。これは多分作者自身らしいピエル・ノジュールミいふ人間が、その幼年期から少年期への生活を追想的に書いたもので、全篇清しい香氣に充ちた作であるが、その中に、「母の話」ミいふ題目で、彼が幼い頃母から聞かされた話が幾つか載つてゐる。母が子供の繪本を土臺にして話して聞かせる即興的な、殆んぎ筋らしい筋もない素朴な小話ばかりであるが、その一つ一つが、子供の中にある欲求、疑問、不安なきを、いかにもやさしく見つめ、取上げてゐる點、子供の讀物ミしても面白いし、大人にも、子供に何か話してやる場合の心組について、いろ／＼教へられるこころが多く、興味深いこ思ふ。「母の話」の第一は「學校」ミいふ題の話である。

ジャンセーニュ嬢さいふ先生の學校ミその小さな生徒達を  
描いてみせる。

「ジャンセーニュ先生の生徒達はみんなおまなしくて勉強家です、小さな人達がじつミお行儀よくしてゐるころは、見てゐてこんな氣持のいゝこゝはありませんね。恰度、それだけの數の小さな瓶が竝んでゐてジャンセーニュ先生が學問さいふ葡萄酒を注ぎ込んでいらつしやるさいひたい位です」

こんな風の話し方である。

「ローズ・ブノワ、十二から、四つ引いたらいくつ残りですか？」

『四つ』ミ、ローズ・ブノワは答へます。

ジャンセーニュ先生はこの答へに満足なさいません。

『では、エムリーヌ・カベル、十二から四つ引けば、いくつ残りますか？』

『八つ！』ミ、エムリーヌ・カベルは答へます。

ローズ・ブノワは黙つてそれからそれへミ考へに耽ります。ジャンセーニュ先生の所に八つ残つてゐるミ云はれ

た、しかし、それが八つの帽子だか、八つの手巾だか、それとも八つの林檎か、八つのパンか、この女の子にはまだ判りません。そこミころがはつきりしないので、

頭を悩ましてゐるうちに随分時間が経ちました。」

エムリーヌは算術の時間がよく出來たので、いゝお點を貰ふ。學校がひけて來るミ、彼女はそれを母に報告し、さてそれから訊くのである。

「いゝお點で、何んな得トクになるの、お母さん？」  
するミ母は答へる。

「いゝお點さいふものは何の得トクになるさいふやうなものぢやありません。そのためにこそ、貰つて自慢になるのです。一番貴い御褒美つていふものは、名譽を興へるだけで、利益なんかのつかないものなのです」

こゝで作者が母親によつて小さい者達に注ぎ入れてゐるこの考へは、あの十六世紀の哲人モンテーニュが彼の隨想錄の中に書いた。

「若し、單に名譽的であるべき褒賞に、それミは別の利得財寶等を混ざるならば、この混淆は、この褒賞に重きを加

へず、却て、之を卑くする。蓋し、徳は純粹に徳のための褒賞、利益よりも光榮ある褒賞を欲するからである云々「こいふ思想を傳へたものであらう。封建制度の中に住んでゐたこの哲人の、周圍は「およそかけ離れた物の見方、考へ方」は、鋭い知性の洗練を経てゐるだけに、幾世紀距つた今、私達の云ひたい事をすばり云つてゐる。

やはり「母の話」の中に、「大きいものゝ過ち」こいふのがある。五人の子供達が、美しい國道を通つて友達の家へ行く途すがらの小さな出來事を語つてゐる。母はまづ、子供に「道」こいふものへの感謝を訓へる。「——道はまるで川のやうに平らできれいで、車の輪や、靴の底をしつかり、氣持よく支へてくれます。これはわたし達のお祖父様方が作つて下さつたものゝ中でも一番立派なものです。このお祖父様方はお亡くなりになつた後にお名前は遺つてゐません。わたし達は、たゞそのお祖父様方がいろいろいふこゝしをして下さつたこいふこゝしを知つてゐるだけです。ほんこゝしに有難いものですね、道つていふものは。さうでせう、道があるお蔭で、方々の土地に出来るものがぎんぎんわた

し達のこゝろへ運ばれて來ますし、お友達同志も、らくに往つたり來たりするこゝしが出來ます」

五人の仲間のうち一人は他の者達より年が少く、大へん小さい。大きい者達は、この小さい子の傍を決して離れないこゝしや、傍道をしないこいふ約束で出かけた。しかし、だん／＼大きい子供たちはそれを忘れて先へ先へ行くので、小さい子は後にのこされ泣きさうになりながら走つて行く。母は此處で次のやうな言葉を挿んでおく。

「大きい者達が待つてやればいゝのに、こあなた方は云ふでせう。自分たちの歩き方をエチェンヌの足に合せてやればよいのに、云ふでせう。殘念ながら、それはこの子たちにしてみれば、大變な徳行を要求されるこゝしです。その點で、この子供は大人達と同じこゝしなのです。前へ、この世の強い者は申します。そして弱い者を後にのこして行くのです。ですが、まあ話の終を待つて下さい」

大きい子たちは突然、おもしろいものを見つけて立ち停る。蛙が跳んでゐたのである。四人も夢中になつてそれを追ひかけ、草原の中へ入つて行く。

「おや、もう草原の中へは入りました。やがて、厚く茂つた草を養つてゐる柔く肥えた土に足がめり込むのを子供たちは感じます。もう五六歩も行くに膝まで泥に埋りますね。草が沼地をかくしてゐるのです。」

やつみの思ひで足を抜きます。靴も、靴下も、ふくらはぎも真黒です。云ひつけを守らない四人の者に泥のゲートルをはかせたのは、緑の草原のニンフでせう」

この時、小さい子は息を切らせながら四人に追ひつく。ゲートルをはかされた四人の者はしほく／＼後へ引き返す。

「だつて考へても御覽なさい、かういふ恰好で、友達の方々に會ひに行けますか。四人がお家へ歸つたなら、お母さん達は、四人の脚を見て子供たちが悪いこみをしたこみをちやん／＼お読みになるでせうね。反対に小さなエチエヌの清淨無垢なこみはその薔薇色のふくらはぎの上に後光のやうにかゞやいてゐるでせう」

子供の心の糧になる「お話」を考へてゐるたつき、かうい

ふ作品を讀んだこみは大變うれしいこみだつた。この「母のお話」は一部昨年出た小國民文庫に載つた。ビエル・ノチエールの全部の譯は「昔がたり」こいふ名でやはり昨年岩波から出てゐる。

#### 口繪參照

五月の或る日思ひついた遊び。外に出られない雨の日は、精一ばい力一ばいを、折柄盛んな相撲に託し、隨時隨所に取組みが始る。時にはコツンと痛い目にもあふ。させたこともあるし、泣かせたくもなしと。そこで有り合せの紐で引つぱりつこを試して見たところ、意外な喜び方。我れも／＼と女の子迄はいつて來る。見てゐながら氣がついたことは、紐は丈夫なこと、長さは五尺位、合圖で始める約束等、最も大事なことは、同じ位の體力の子を選ぶこと。戸外でも勿論いゝ。雨の日には腰掛を一寸かたづければ、たとへ狭い室内でも十分に遊べる。口繪の眞剣な二人のすがたを見て頂きたい。